

研究論文

日本人論のマクロ情報学
Macroinformatics of Japanology

稲垣 耕作 Kosaku INAGAKI

京都大学大学院 情報学研究科
Graduate School of Informatics, Kyoto University

天野 真家 Shin-ya AMANO

湘南工科大学 工学部 情報工学科
Department of Information Science, Shonan Institute of Technology

要 旨

日本人論というジャンルの書籍は過去に国内で数千点が出版されてきたと推測されるが、その背景にあるのは、日本人は特異であるとの国内外からの根強い指摘である。本論文では総合の学としてのマクロ情報学の手法を用いて、主に古代から現代までの日本語という情報を対象として、ミーム(文化遺伝子)という観点から進化的視点の日本人論を試みる。トップダウン的に導入された思想よりも、ボトムアップ的に自律形成された日本人像を重視する立場をとる。言語の面で日本人に最も顕著であるのは、「変化」のミームではないかと推測される。他言語に比して言語の自律的变化が著しい。しかも文字言語の変化とともに日本社会が大きく発展を遂げている特徴が目される。また、「生」のミームも大きな特徴であると推測されるため、わが国の文化を新たに「生の文化」と呼び、生態学的文明を検討した。日本語にはきわめて長い期間の日本文化が反映されているはずであるが、敬語に女性差別の痕跡がないなど、従来の見方とは異なる日本人像を提示するとともに、メディア論における顕著な知見も得た。

Abstract

Japanese uniqueness has been widely discussed in Japan and in the world as thousands of books on Japanology, or even nihonjinron (means studies on Japanese people) established as the name of this genre. This paper proposes an evolutionary Japanology by means of macroinformatics analyzing historical Japanese language integrally and extracting the memes, i.e., cultural genes, of Japanese people, employing bottom-up approach based on autonomic organization of potential nationality, rather than top-down approach based on social systems and thoughts. The most noticeable characteristic can be the meme of change, which has been leading the innovative changes of Japanese society. The meme of life is another remarkable one characterizing Japanese sei-no-bunka, i.e., life-oriented culture, with which prospective ecological civilization is discussed. The absence of gender discrimination in Japanese honorific expressions and other cultural characteristics are investigated. In particular, a novel media theoretical result has been proposed.

1. はじめに

わが国には、日本人論あるいは日本論や日本文化論などと呼ばれる特有のジャンルが存在する。戦後の著名な書はベネディクトの『菊と刀』^[1]などが代表的であるが、1978年に野村総合研究所が行った調査^[2]では、戦後だけですでに約700点の書籍が網羅されていた。また青木保^[3]は1990年の時点で、2000点以上存在するのではないかと推測した。出版界において他国と異なる顕著な特徴であるとみなされている。

そのような活況の背景には、日本人は世界的に特異であるとの根強い見方が存在すると考えられる。ただ、それを肯定する意見もあるし、否定する意見もあり、決着がついているわけではない。しかも、たとえば多田道太郎が文献^[4]の解説で指摘したように、文化論というジャンルは考察の粗雑さを免れないのが大きな難点である。

多田が考察のために「もっとも精緻な武器」を求めたため、

それへの一歩として、著者らが提案したマクロ情報学^[5]という総合学の手法を適用してみる。そして対象とする情報を、主に「古代から現代までの日本語」に設定した。日本語には、きわめて長期間の日本文化や日本人の考え方が反映されるはずであるため、言語情報から日本人の特質を読み解こうとするのが本論文の試みである。手法的には文化人類学の系統にも属する。

本論文では、そのような日本人の特性を表現するのに、「ミーム (meme)」という比喩を用いた。これは進化生物学者ドーキンス^[6]が最初に用いた言葉である。文化には生物の遺伝子に類似した側面があり、われわれを乗り物として、世代を介して伝えられると考えた。いわば文化遺伝子という見方である。その背後に進化という概念を有する用語である。

今回は、日本語から主に「変化」のミームと「生」のミームを抽出した。前者の知見によれば、わが国の文字言語が大きく変化した時代に、日本社会が顕著に発展を遂げている特徴がある。また後者に基づいて、日本文化を新たに「生の文化」と呼

び、今後の生態学的文明の可能性に触れた。この概念は古代ギリシャ哲学や江戸期以前のわが国の生き方とも合致している。今後のバイオ技術の振興などとも密接に関連する。

日本語という言葉の中には、さまざまな興味深い特質が潜んでいる。たとえば、敬語には女性差別の痕跡がないことや、和語における抽象語の極端な少なさなどである。そのような特質に基づきつつ、本論文としての日本人像や今後の日本社会の方向性などを検討する。

本論文はその第1報であるが、従来のような少数者の日本史ではなく、ものいわぬ多数者の日本史に注目している。また近代合理主義を克服する構造主義的な論法^[7]を含むため、近代合理主義教育を受けた人々には理解しにくい面があるかもしれないが、情報文化学としてこれまでにない大きな分科の構築を目指した第一歩のつもりである。また、従来の情報文化的視点でいえば、メディア論への新たな知見が本論文の顕著な貢献であると考えている。

2. 従来の日本人論の問題点

日本人論をさかのぼると、過去にも大正期の和辻哲郎『風土』や、明治期の福沢諭吉など多くの人々が日本人について論じている。また、江戸期の国学、さらには鎌倉期の随筆など、日本人とは何かを考えさせる著述は数多い。

ただ、戦後にベネディクトの著作に触発されたように大きくブーム化して、非常に多くの日本人論が出版され、出版界でひとつのジャンルを形成していったのが特徴的である。梅棹忠夫『文明の生態史観』^[8]、中根千枝『タテ社会の人間関係』^[9]などが著名である。

しかしながら、日本人の特異性という見方に対して、杉本良夫ら^[10] Dale^[11]、吉野耕作^[12]など根強い批判も存在する。たとえば「背広を着て眼鏡をかけた日本人」という画一性に対して、アメリカ人も「Tシャツにジーパン」で画一的だというアイロニーなどである。人間性は多様であるため、あたかも血液型古いなどと同様に、何を指摘しても一面では当たっているとみなされるわけであり、恣意的な論理が横行してきたといえる。

また、青木保^[3]は出版界で消費財化していった日本人論という問題を指摘する。大量に出版された日本人論には、大衆の目をひく目新しささえ備わっていればよく、出版界には内容の真偽を問わない風潮もあったことであろう。

それとともに、多くの日本人論は、同時代あるいはせいぜい近現代の日本人しか検討していなかったという欠陥をも指摘しておかなければならない。高度成長期などのみを観察した日本人像は、かならずしも普遍的な国民性を示していないかもしれない。人民服時代の中国人を見て、現在の中国の成功を語るわけにいかないのと同様である。

特に日本人に大きな希望を与えた書に、ヴォーゲルの『ジャパ ン アズ ナンバーワン』^[13]がある。しかし現在この書を読めば、彼が描いた成功モデルは、ことごとく水泡に帰した感さえある。戦後に大発展を遂げた日本の成功は、はたしてまぐれあるいは幸運に類するものにすぎなかったのだろうか。

そのような疑問が、著者らの研究の一つの動機を形成している。今回はその最初の論文であるが、幸いにも日本人像から過去の成功に関する新要因を見出しつつあると思われる。今後のわが国に対して、情報文化学あるいはマクロ情報学からの貢献の道を探っていきたいと考えている。

3. 日本語を対象とした研究手法

本論文では従来の日本人論と同様に日本の文化や歴史を素材にするが、おおむねよく知られたものにすぎず、主眼とするのは情報学だという点である。この研究の根幹にあるのは、図1に示すような「進化」と「学習」の相違という考え方である。

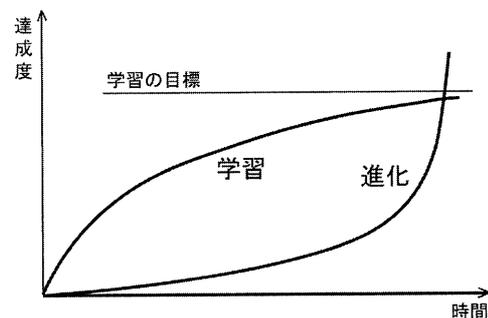


図1 進化と学習の相違

従来のキャッチアップ型の発展は機械学習曲線に類比できよう。機械学習は目標とするラインをけっして超えることができない。一方、進化はある時点でそれを超えて爆発的な変化を起こしうる^[14]。地球46億年を24時間にたとえれば、人類の500万年ほどの歴史は最後の1分半にすぎないようにである。

進化型の発展は雌伏期間というべき長期を要するが、現在に至る日本人像から、われわれなりの文化遺伝子を探ろうというのが本論文の試みである。すなわち手本なき時代において、キャッチアップ型で達成できなかったような新たな発展の可能性を探る意図を有している。あるいは、日本人の文化遺伝子的特性を前提に、よりその特性に適した分野での学習による発展という相乗効果を目指している。

その最初の一步として、本論文では歴史上の日本語を主たる対象として、日本人像を考究した。歴史上の日本語文書を対象とした研究は、従来の人文・社会諸科学分野などで行われ尽くしているときえいえようが、そこに情報学の視点を持ち込んだとき、なんらかの情報学あるいは進化的観点からの新知見を得る可能性があるのだろうか。それが著者らの問題設定である。

特に情報学はいまだに歴史の短い科学であるため、従来の伝統的な諸科学に比して、新しい知見を付け加えたり、従来以上に強力な道具になりうるかという問題がある。情報学研究者はしばしば伝統諸科学分野で下働きの役割とみなされるのが現状であるため、従来の諸科学よりも優れた知見を提出できるかという問題は、情報学研究者にとって非常に重要である。

そこで本論文では、情報学手法の常として、情報の意味内容よりも、主に情報の構造の側に注目するという立場をとった。歴史上の文書の意味内容はすでに諸分野で多くが検討され尽く

している。しかし、その文書を書いた日本語自体の構造や統計的特徴などの検討に、情報学が貢献する余地があると考えたわけである。ただし、単語レベルや文法レベルで表現される意味内容まで捨てるわけではなく、通常の自然言語処理の研究で採用しているのとはほぼ同レベルである。

たとえば「和を以て貴しと為す」とあったとしても、そのメッセージよりも、記述した日本語自体に興味をもつという手法である。意味内容を考えるという従来の手法は実は危険性をはらんでおり、集団主義的と解される「和を以て」に対して、アダム・スミスは個人主義的な「利己」という「神の見えざる手」の立場をとった。意味内容の分析はしばしば真向から対立する結論を引き出しかねず、それを避ける意図をもっている。

また、別の視点としては、歴史上の著名な文書は偉人たちの考えを記したものが多いたが、その意味内容の分析は、いわばこの社会にトップダウン的に形成されてきた日本人像を考えることであろう。一方、文書を記述した日本語の分析は、日本人全員がボトムアップ的に形成してきた日本人像を抽出する可能性をもっている。いわば逆転の日本人論となる可能性があり、しかも進化的である可能性も有することを特徴と考えている。

4. 変化のミーム

このような研究では、従来のわが国の発展において主因とはみなされないほど潜在的な要因が、実は今後は大きな役割を演じるかもしれないという可能性を否定するべきではない。進化型曲線で例示したように、それらの特性は、文明の発展としては、いまだに潜在的レベルのままにとどまっている可能性さえあるからである。その点で虚心になって日本語という対象を検討するというデータ主義の立場を主とした。

われわれが日本語^[15]の特徴としてよく見知っているながら、ほとんど検討しようとしてこなかった問題は、日本語の変化速度ではなからうか。たとえば昭和12年発行の文部省による『尋常小学国語読本』^[16]にはまだ御座候文が掲載されている。行書体活字で組まれた手紙文である。戦前はこのような文体を小学校で教育し、社会でまだ生き続けていたわけである。

歴史的変化を簡潔に例示するのみだが、江戸時代の木版刷りを読むにも、崩し字や変体がなりの知識が必要であり、日本語表現の変化は大きい。たとえば『東海道中膝栗毛』は約200年前の大衆文学であるが、著者らはその挿絵でさえ読みこなすことが困難であった。

一方、英語圏を見るに、それより1世紀古い約300年前の『ロビンソン・クルーソー』はわずかに古語を含むのみで、現代の高校生でも十分に読みこなせる。原題は『The Life And Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe』であるが、現代のSurprisingの綴りがわずかに変わっているにすぎない。

留学生などに問うと、英語の変化は緩やかであるという。中国語も明清の時代ならわかりやすく、1000年以上前の唐になると読みづらいとのことである。朝鮮語は15世紀のハングル以降なら読める。また、アラブ圏の共通語フスハは、イスラム

教の神の言葉を起源とするため、7世紀以降変わらないのを原則としてきた。日本語ほどの変化を経過した言語を各国で見出しづらいのである。

江戸以前の時代の発音は、旧かなづかいに近いものであったはずであろう。それが時代とともに大きく変質してきた。たとえば、現在「チョウ」とする発音は、旧かなづかいでは「テウ(鳥)」「テフ(蝶)」「チヨウ(重)」「チヤウ(丁)」の4通りがある。かっこ内は対応する漢字例であるが、これらの発音の使い分けが日本語に存在し、それが徐々に失われてきたと考えるわけである。

しかも、日本語における急速な変化は、古代においても激しかったのは、通常の歴史書によっても、『万葉集』にまつわる逸話が代表的であろう。同書は8世紀後半に編纂されたが、編者の大伴家持が親族の起こした事件に連座したため、その財産が没収され、10世紀半ばまで死蔵されたのである。

それが再び世に出たとき、万葉集を記述した万葉がなはずで忘れ去られていて、困難な解読作業が必要になったのである。音がなのみなら読みやすいが、訓がな、漢字の訓読み、漢文表現などが交じっていた。古代にもわずかに百数十年のうちに言語文化上の大きな変化が起こっていたわけである。

しかも万葉がなの研究によって、上古の日本語は8母音であったとする説が国語学では通説化している。それが平安時代には現代に近い5母音に変化した。古代において単に文字言語の表現法が変わっただけではなく、口語にも絶えざる変化が続いていたのである。

日本語の変化の原因として、日本語の完成度が低かったため、現代に至るまで絶えず変化し続けざるをえなかったという見方がある。ただ、重要な反論材料は、世界最古の長編小説とされる『源氏物語』などの平安朝文学である。平安朝にはすでに日本文化は成熟期に入っていたとみなされる。1000年前のヨーロッパ文学を凌駕する水準だったとするのが定説である。そのような文化を生み出した言語の完成度が低かったとはいいがたい。しかし現代まで日本語はさまざまな変化を続けてきたわけである。

このような変化を、世界の文化の中でも特に激しいとするかどうかは、著者らのみで結論づけられるものではない。言語学研究者の見解の定着を待ちたく思う^[17]。ただ、日本語には「変化」というミームが存在するのではないかという仮説を提唱したいと考える。しかも、われわれの知的活動の大部分は言語活動であるだろうから、それは日本人の国民性自体が、変化を志向するミームを有しているのではないかとする仮説でもある。国語の変化は国民全員が引き起こしてきたものであろうから、これは日本人と日本語に関するボトムアップ的な観察である。

5. 文字言語と社会の変化の連動性

このような日本人の変化のミームを情報学的にさらに分析したい。社会全体として平和で文化的な変化の時代を主な対象とする。そのとき、「文字言語」の変化とその普及が、わが国の社会や文化における高水準の変化と明確に連動したという点

は、メディア論として非常に重要であろう。

まず文字言語の代表的な変化を、時代順に列記すれば以下のものとなる。これらはいずれも平易さと利便性の向上という面で文字言語が大きく貢献した変化である。

- (1) 漢字と万葉がなの普及
- (2) カタカナ・ひらがなの普及
- (3) 活版印刷と言文一致体の普及
- (4) 新字・新かなづかいの普及

近代において日本社会は2度の大きな変化を経験した。明治維新と戦後復興である。いずれも世界的にもきわめて高水準の変化だったろうが、それぞれ(3)および(4)と連動している。

実際、明治維新では活版印刷が明治3年から本格化し始め、日刊の横浜毎日新聞が創刊された。明治5年の『学問のすすめ』は70万部も発行された。この時点で日本語文は江戸期よりもはるかに読みやすくなり、内容も近代化された。それに続いて言文一致体を小説家などが採用するようになっていった。

また、当用漢字と現代かなづかいは、終戦の翌年である1946年に告示された。この変化は、文字言語を口語に近づけ、表記の単純化、標準化の効果をもったわけであるが、戦後の大きな成功的变化と軌を一にしているのが観察される。

また(2)のカタカナ・ひらがなの普及は、平安時代のかな文学の隆盛を招いた。それは世界最先端水準の女性文学であった。代表する『源氏物語』は100万文字近い長編であるが、現代に読み継がれる高い文学性を有している。文化的にわが国が高度な水準に達した時代であった。

一方、(1)の漢字と万葉がなの普及は、日本社会にどのような変化を起こしたのであろうか。やや意外かもしれないが、上古においても世界最先端水準に達する変化をひき起こしたことを歴史から知ることができる。

文字普及以前の状況は、「魏志倭人伝」における邪馬台国の記述などから知られる。3世紀半ばに庶民ははだしで、木綿の布をほぼ縫わずにまとっていた。体には朱を塗っていた。当時の遺跡を見れば、彼らの住居の多くは竪穴式住居であった。

しかしそのわずか1世紀半後、日本では曲がりなりにも世界最大級の建造物を構築し始める。応神天皇陵とされる古墳は5世紀初頭、それをわずかに上回る仁徳天皇陵とされる古墳は5世紀半ばまでの築造である。いずれも1辺230mであるクフ王のピラミッドを大きく上回る面積であり、世界最大の墓とされる。仁徳陵の墳丘は全長486m、濠の外周は2.7kmである。

万葉がなの成立は5世紀ごろと推測されるが、史料が乏しい。5世紀後半の稲荷山古墳から出土した鉄剣に「ワカタケル大王」などの初期の使用例がある。ただ、漢字の使用はかなり進んでおり、そのような文字言語の普及とともに、わが国は文化レベルを急速に進展させたのであろう。8世紀初頭の『古事記』においては、万葉がなはすでに安定している。

万葉がなの普及以降、奈良時代には東大寺の大仏が完成した。752年開眼である。世界最大の金銅仏であるのみならず、大仏殿も20世紀初頭まで世界最大の木造建築物と位置づけられてきた。この時代にわが国は技術力においても世界最高水準を達成し始めたわけである。同時代には、年代が判明しているもの

として世界最古の印刷物も残されている。百万塔陀羅尼であり、法隆寺には4万基以上が保存されている。

通常の日本文史書を見れば、文字言語の大きな変化の影響を受けた時代以外には、わが国が世界一を誇るものはわずかにすぎない。封建時代には、刀剣の鍛造技術、火縄銃の普及速度、世界最大の金貨である天正大判などが見られる。ただ、海外から注目される唯一は、江戸が世界最大の100万人都市だったことであろう。それについては、江戸時代の識字率の高さも関連するであろうが、「生」のミームとの関連を後述する。

ここで特に指摘したいのは、文字言語と社会の変化の連動性がかかなり明確であるという点だけでなく、わが国では社会の変化がひとたび起こったとき、それが世界的水準となったという国民性を有する可能性でもある。すなわち本来にそのような国民性を有するのではないかとこの可能性を重視して、その点で変化のミームと命名した。

6. 情報伝達力の臨界現象仮説

このような変化が、主として文字言語の変革期に起こったことは単なる偶然であろうか。あるいは変革期であったから、文字言語の変革も副次的に起こったと考えるべきであろうか。因果関係は不明であるし、効果は相乗的であったのかもしれないが、事実としては文字言語がやや先行的である。

著者らは、情報伝達力における臨界現象という仮説を述べておきたい。情報学分野で著名なシャノンの通信路符号化定理、すなわち情報理論における第2定理である。

伝言ゲームという比喩で述べよう。たとえばこの論文の内容を読んだ読者を1人目として、誰か2人目にその内容を、話し言葉で伝達するとしよう。内容はほぼ伝わり、2人目はわかったと感じるだろう。しかしその2人目が別の3人目に伝えようとすると、話し言葉では情報はそれほどうまく伝わらず、情報の多くが失われるのが常だろう。その3人目が4人目に伝えようとするれば、さらに情報は失われ、急速に消え去っていく。シャノンの用語を借りれば、人々の間の通信路容量は意外に小さいということである。

彼の理論によれば、よく知られているように、通信路容量には臨界点が存在する。通信路の性能がある値以上に改善されたとき、どんな情報でもほぼ正確に世の中に伝わり始める。一方、それ未満では単純な情報以外はほとんど伝わりにくい。そのようなシャノン理論を援用するなら、話し言葉ではなく、簡明でわかりやすい文字言語表現法が広く普及したほうが、人間社会という通信路の性能ははるかに向上するわけである。

知が大衆レベルまで急速に普及する仕組みやツールを構築した時代に、前時代に比して大きな発展を遂げたと考えることには、このようなシャノン理論からは無理がない。情報面でごく小さな力を加えただけに見えるだろうが、テコの効果のように大きな変化を生み出しうるのが、臨界現象や相転移などと呼ばれる効果である。臨界現象が生じたいくつかの時代をここで指摘したのかもしれないわけである。

もちろんそれらの時代になぜ顕著な変化があったかについて

は、歴史および政治経済面などから、過去にも詳細な説明が加えられてきたはずである。それを本論文で再記する気にならないのは、もしそれらが真に正しいのなら、現代にもそれらを適用すれば、わが国が失われた20年などと称される沈滞期に陥ることなどありえなかつたはずだからである。しかし、現実には伝統的な経済活性化はその効力を大きく減じているようであるし、従来の説明は前記の全期間に適用できるほどの普遍性も有していなかつたのではないかと推測する。

このような平和時の変化の歴史を振り返ると、日本人は潜在レベルでかなり優れた資質を備えているかと推測される。しかしそれが近年明確に発揮されないのは、真の国民性を発揮する環境が十分に整っていないからでもあろうか。従来型の説明もあろうが、本論文の指摘に基づけば、近年は情報の臨界現象効果を引き起こさず、知の自己増殖機能が抑圧された状態に近いため、変化のミームが発動されにくいのかもしれない。

たとえば、ゆとり教育という教育制度の失敗も深刻であろう。発信された情報を受けるのに十分な知識をもたない若者が増加したのではないか。しかも、1946年の「現代かなづかい」は、1986年に「現代仮名遣い」に改められ、2010年の常用漢字の改定も文字言語を複雑化させる内容となった。情報はますます伝わりにくくなっているわけである。

なお、英語の歴史を通観すると、1500年余り前にゲルマン系のアングル人、サクソン人などが移り住んで、言語を形成してきた。古英語から中英語にかけては変化が激しく、先住のケルト語、バイキングの侵入、フランス語、ラテン・ギリシャ語などからの借用を重ねて、近代英語を確立していった。1476年の活版印刷の開始以降、言語が安定し、近代英語が世界言語としての道を歩んでいった^[18]。彼らは単純な表音文字を用いたため、文字言語では活版印刷術のみが大きな画期とみなされる。

活版印刷はルネサンスの3大発明の1つとされるように、その情報伝達力の大きさが文明の進展に多大な影響を与えた^[19]。このメディア論は、印刷術では歴史的に実証されていたように、電子メディアでは歴史が浅く、十分に立証されていなかった。今回、日本語の文字言語の変遷による影響は、メディア論の実証という点で本論文の新たで大きな貢献であると考えている。

7. 敬語と女性差別の問題

本論文で述べているのは、「文明の言語史観」ともいえるべき内容でもあるが、特に過去の日本人論は封建的遺制の周りを重点領域としてきたが、それはなぜだろうか。言語面では当然ながら敬語との密接な関連が推測される。敬語が高度に発達した言語は、日本語、朝鮮語、ジャワ語、チベット語など少数であるが、上下関係を重んじる敬語が発達したため、いわゆるタテ社会が根深く残存したのであろう。

しかしながら、わが国の敬語の体系には女性差別思想がほとんど痕跡をとどめていないことも指摘しておかなければならない。男尊女卑の時代が続いたものの、国民が言語をボトムアッ

プ的に変化させてきた歴史において、敬語に影響するほど長期間ではなかつたとみなすべきであろう。

この指摘は従来ほぼなされてこなかつたものと思われるが、先述の日本の興隆期とも直結していることを指摘したい。すなわちわが国が世界から注目されるほど興隆した時代は、女性も活躍できたり、男女平等の機運が強まった時代でもあるとみなされるからである。

戦後については述べるまでもなく、また平安朝文学は女性が主体である。一方、明治期には女性解放が始まった。福沢諭吉は男女同等を唱え、慶応義塾幼稚舎では男女共学を行った。明治3年には津田梅子ら少女5人も岩倉使節団で米国に留学している。

では、大仏建立などに至る上古はどうであろうか。天皇の在位年代がはっきりしているのは、592年即位の第33代推古帝以降だが、推古帝自身が女帝である。平安時代を迎える桓武帝(男帝)の直前の第49代光仁帝(男帝)までの17代を見ると、8代が女帝であり、ほぼ半数である。これ以降は、朝廷がほとんど勢力をもたなかつた江戸期に2帝を数えるのみである。

社会の進化戦略という視点では、男女平等は明らかに有利である。社会の競争的成員の母集団がほぼ2倍に増えるからである。たとえば入社試験などで、受験者が多いほど有能な社員を選抜できる確率が高まるのと同じ理由である。

それ以前、邪馬台国は卑弥呼という女王が治めた。後を継いで治めたのも、台与(とよ)という女性であったと伝えられる。本来の日本思想には女性差別思想は希薄だったと推測されるわけである。一方、輸入思想である儒教と仏教には男尊女卑傾向があつたため、女性差別的色彩が強まったようである。

簡潔に述べているのみだが、先述の日本の興隆期における普遍として、日本人の変化のミームを発動させるために、情報流通の改善と女性尊重の2点を少なくとも抽出できたということである。いずれもごく自然で合理的であるにもかかわらず、従来は注目されることが稀であった特色でもあろう。

もしこのような方策を現代においても実施するなら、情報流通面の改善は極端な予算を要するものではないだろう。一方、女性の力をより活用するには、企業への保育所の併設など費用はある程度かかるが、それほど大きくない。従来の方策とも併用できるものであるから、ここで特に指摘しておきたいと思う。

8. 「生」のミーム

日本語から日本人を考える際、都という中心地ではなく、雑という周縁地帯について調べることも重要なはずである。柳田国男^[20]が伝承民話の研究で「常民」と呼んだような人々であり、ボトムアップ的な調査の視点でもある。本論文では、方言の研究をその有力候補としたが、顕著な性質を見出しがたかつたため、地名を選んだところ、興味深い知見が得られた。これまで明確に指摘されなかつた潜在的な国民性といったものである。

なおこの論法は、構造主義において婚姻構造^[1]を論拠としたのと同種であるため、構造主義を知らない論拠の重要性を判断しにくいかもしれない。構造主義が近代合理主義を論破し

たのと同様の潜在的な影響力を想定して、著者らはその理論展開の第1報としてこの指摘を行うものである。

『JIS 漢字字典』^[21]はJIS漢字コード制定の調査成果をまとめたものである。全国約46万件の地名、検定教科書約1500点など数十億文字の調査を行った。本字典にはその出現漢字と読みなどがまとめられている。

それらを一覧すると、日本語の漢字用法のきわめて顕著な特徴として、地名や人名で「生」の字のみが極端にさまざまに読まれていることが抽出された。著者らが同字典で数えたところ、地名で276通り、人名で303通りであった。常用漢字で認められた読みは12通りであるので、それをはるかに上回る。たとえば「福生(ふっさ)」「壬生(みぶ)」など非常に多様な読みが地名や人名でなされているのである。

「生」以外の大部分の漢字では読みは数通り以内であり、20通りを超えるものでも珍しい。地名の読みに関しては、第2位は「上」の61通り、第3位は「下」の57通りである。

歴史上の地名の成立には、山にある田だから山田とするなど、地勢などの環境という外発的要因に由来するものが多数であろう。「上」や「下」にもそれらが多数含まれる。一方、「生」という抽象的文字は、主に日本人の内発的要因によって用いられたと推測されるわけであり、その点がきわめて興味深い。

ただ、この統計をどう読むかは慎重を要する。情報学でよく知られたZipfの法則^[22]は f 分の1ゆらぎなどと同等のべき乗則の一種であるが、統計学上のゆらぎの法則以外に主要な意味づけはない。たとえば英単語の使用頻度はtheが最多で、第2位のofの頻度はその約2分の1、第3位のandはtheの約3分の1となるなど、順位の反比例となる法則などである。この法則性は都市の人口分布などにも普遍的に成り立ち、多くの事例が知られている。

しかしながら、今回の「生」の読みは、べき乗則に照らしてみても、数値が異常だと考えるべきであろう。日本人の内発的要因あるいは文化的要因が関与したと考えたほうがよいと思われる偏りである。各地で独立に地名に漢字を割り当てたはずであるが、たとえ無理な読みであろうと生の字を用いた。それに関与した日本人の数は無数というほど多数のはずだが、同じ文字に集中したのである。しかも近年の姓名、特に名にも用いられ続けているのであるから、時代を超えた特性でもあるとみなすべきであろう。

本論文ではこの事実を、日本人の特質としての「生」のミームと呼んでおきたい。あるいは、日本文化として、「生の文化」が濃厚なのではないかと考えたい。欧米は古代ギリシャ以来の合理主義精神が濃厚であるため、対比すれば彼らは「理の文化」とするのが適切ではないかと思われる。

このような生の文化を立証しようとする際、従来の論法では、さまざまな関連事例を列挙するという手法を主とした。たとえば自然を尊重する詩歌の伝統などから説く手法である。しかし、事例主義は見かけの説得力を有しても、恣意的な事例選択である恐れが伴うため、信頼性が高いとはいえないという懸念が残る。たとえば、事例さえ選べば、日本は「死の文化」であると例証することもできるだろう。ここではそのような難点を避け

るため、統計データのみにとどめた。

著者らが生の文化に関連して特に注目したのは、古代ギリシャ哲学における「プシュケー(生)」と「ソーマ(物質)」のいずれを重視するかという対立である^[23]。欧米の理の文化は、ソーマを重視する原子論の流れに傾き、科学技術文明でいったん大成功を収めた。しかしながら、地球環境の深刻な破壊を引き起こすとともに、科学技術は非常に伝承しやすかったために、アジア諸国などでも科学技術立国が進み、欧米の優位性が急速に失われた。代わって欧米が近年採用したのは、金融立国などの経済学という科学の分科の手法であったが、リーマンショックやユーロ危機などで世界経済は苦境に陥りつつある。

そのような中で、日本文化におけるプシュケーの発掘を試みたと考えていただくとよいだろう。わが国の科学技術立国も、近年の新興国群の急速な追い上げによって優位性を失いつつあり、今後の方向性を模索しているが、生の文化という古代ギリシャ以来の対立概念が、実はわが国の国民性とより合致しているのではないかという潜在的証左が存在するわけである。

9. 生態学的文明を考える

江戸時代は鎖国が長かったため、近代世界の流れから大きく取り残された。それでも江戸の人口が世界一となって繁栄した点にはおおいに興味を引かれる。寺子屋教育による識字率は一般に70~80%台と推測される。表音文字圏に比較して、非常に高い努力の成果であろう。ただ残念ながら、女性の活躍の面では衰退した時代であったが、わが国の人口が3000万人程度で安定して、特色ある文明の時代であったのは事実である。

見方としては、生態学的に安定した文明として、そのモデルケースの一つが江戸時代であったのかもしれない。東京湾に流れ込んでいた利根川の流れを現在のように変更するという大規模工事を行い、埋め立てや上下水道の完備を行って、100万人都市の生活基盤を構築していったのである。

リサイクルの事情は完備していたようである^[24]。産業革命時のイギリスは樹木の伐採で禿山にしてしまったが、江戸の生活は再生可能エネルギーの範囲内であったと考えられる。1600年代後半には、ごみを集めて深川の東部を埋め立てて新田にするなどの事業を行っている。さまざまな修理業者やリサイクル業者が存在したため、町にほとんどごみが落ちていず、欧米人を驚かせた。製紙法もコウゾの1年生の枝を用いるものであり、ヨーロッパのように木を伐採する方法を取らなかった。ローソクが燃えた後のしずくを買い集める専門業者さえいたという。

ここで述べているのはまだ一仮説にすぎないのだが、地球環境と共存しつつ、文化的にも独自の高度さを保って生活できることを実証したのが江戸時代だったのではなかろうか。それは生の文化という側面をもち、近代に入って理の文化を築こうとした欧米と異なる文明像でもあろう。今世紀はもちろん情報文明という側面もあるが、生命と地球環境重視という側面も看過しがたいため、江戸文化の研究などもまた重要であろう。

機械文明は、ニュートン力学、量子力学、アインシュタイン

理論などの物理学という基礎科学によって方向づけられた。一方、今世紀最大の基礎科学上の成果は、生命科学系であって、著者らはおそらく進化理論の完成などではないかと予想する。ダーウィンの進化論はいまだ地動説と比較される段階にすぎないが、それをニュートン力学に相当する水準へ高度化していくのではないかと予想である。知能機械の人工的進化をも含む可能性があるため、情報学との関連性もまた深い。

そのような基礎科学の方向性が、文明の方向性も決めると仮定すると、今世紀には生の文化がより重視される可能性が高いのではないだろうか。現在のわが国からの貢献は、iPS細胞などの再生医療技術が代表的であるが、おそらくがんの克服など医療技術の進展は今世紀に著しいであろう。

それとともに、再生可能エネルギーという問題にも注目しなければならない。欧米型に引きずられると、太陽光発電や風力発電など機械文明型が重視されがちである。それらもやがてコスト的に引き合うとされるが、出力が一定しないため、蓄電技術が必要となる。蓄電しない場合、たとえば太陽光発電の場合、1日平均3時間程度の直射太陽光しか利用できないため、電力の1割を代替できるにしても、全電力は代替しがたいのである。水力発電を加えても、わが国の再生可能エネルギー比率の目標は20%台程度にとどまってしまうことになる。

蓄電技術は、たとえばリチウムイオン電池は高寿命品でも充放電寿命が数千回程度という制約を考慮すると、現状では非常に高価となり、電力価格を1桁程度上げかねない。一方、キャパシタを利用する場合は10万回以上の寿命が可能であるが、コスト的に研究途上である。機械型技術は製造時のCO₂排出などを含め、まだまだ難題を解決しきっていないのである。

一方、著者らの専門ではないが、生命技術型の有望性をも指摘しておきたい。たとえば「植物の高速育成技術」などである。太陽光を1日平均3時間利用できて、しかもエネルギー生成効率をさらにその10%とすると、植物起源のバイオ燃料でもわが国の必要電力をまかなえる可能性がある。国内でも各種の関連研究が行われているようであるし、米国ではすでにトウモロコシ生産の4割をバイオ燃料に回している。この種の技術は、再生可能エネルギー比率の向上を促し、持続可能かつ物質的に豊かな時代を迎える可能性をもっている。

特に、たとえば住宅の柱材を1～2年で育成できるようになれば、わが国の住宅事情は一変するだろう。現在は空想的な技術にすぎないが、その技術革新の効果は大きく、新たな消費や大きな雇用の原動力にもなりうる。すなわちソーマの視点を捨てないブシュケーの文明である。化学的な人工光合成技術も重要であるが、各種プラスチックを含めた物質生産の面で、植物育成技術の可能性のほうが高いかと予想する。このような文明の方向性は、もし日本人が生文化を志向するなら、よくマッチしているのではなかろうかとあえて提案しておきたい。

10. 抽象的思考力の問題点

日本語の別の特徴として、和語には抽象語がきわめて少なく、多くの抽象語は中国語からの借用語であることがある。たとえ

ば自然言語解析に用いる電子化辞書には約44万語が登録されているが、形容詞はほとんどが和語であるため約4100語にすぎず、1%未満である。「抽象」のミームが不足しているというべきかもしれない、それが日本人の大きな弱点でもあろう。

わが国最大の漢和辞典である『大漢和辞典』によれば、形容詞の場合、訓読みを「おおきい」とする漢字は225字も存在する。「たかい」が126字、「うつくしい」が112字である。従来、日本人は情緒的で芸術的感性が高いとされてきたが、その表現は写生というナマの自然を写すことを主体としており、抽象化された情緒ではないという生の文化であろう。

動詞の場合も、「うつ」を訓読みとする漢字が235字、「みる」が220字、「おさめる」が181字である。形容動詞においても、「あきらか」が199字、「おろか」が111字などという状態であり、中国語と格段の差が存在する。

抽象的思考が発達したのはインド・ヨーロッパ語族が代表的であると考えられる。抽象的思考の骨格として最も重要なのは論理であろう。論理学の定式化は言語の影響を受けることが顕著なためか、インドの論理学もギリシャ論理学とよく似ていると聞く。一方、中国語は論理構造が不明確であるため、欧米より論理性が低いとされがちであった。しかしわが国においては、それがさらに深刻で、そもそも抽象化するという動機自体が国民性の中に希薄ではなかったかと思われるほどである。すなわち抽象化や論理の弱さが推測されるわけである。

その原因として、日本語が未熟なうちに、漢字が伝来したためという説明もあろう。しかし中国語に対応する和語をなぜ生み出さなかったのだろうか。「道理」「論理」「理論」「理由」「理非」「事情」「当然」「格式」などがすべて「ことわり」である。一方、四十八茶百鼠というたとえがあるが、江戸時代に多数の茶色と鼠色という具体色の命名なら行っている。

また歴史上、海外からは日本思想として最も典型的なのは禅思想であるとされる。ナマの経験を重視するが、論理を蔑視する傾向が強く、直観的な悟りを求める。「一即多、多即一」として、要素と全体集合を一致させる。あるいは無という空集合を、有という全体集合より大きいとするため、論理の枠組みが完全に崩壊する。本来は外来思想であるし、現在の日本人が禅思想に親しんでいるわけではないが、さまざまな詭弁的論理が横行しがちになってきたのではないかと懸念する。

あるいは、情報産業に関連して述べれば、抽象的思考力はおそらくソフトウェア産業向きであろう。従来から日本がソフトウェアに弱く、インドがその産業化で急速に台頭したこととも、この観察は符合していると思なせよう。そのような国民性が信憑性の高いものかどうかは今後の研究に待つほかないが、著者らの前論文^[9]でも、ハードウェア指向の情報産業活性化策を提案したわけである。

古代ギリシャは通商国家であったため、文化の異なる他民族と接触することが多く、論理を発達させる必要があったと思われる。一方、わが国は孤立した島国で、かつほぼ単一民族であったため、万葉集にさえ「言挙げせぬ国」、すなわち言葉に出して言い立てない国としてきた。

ハイテク製品など具体物を輸出している時代は、それでも大

きな支障にならなかったであろう、ただ、今後のわが国を考えると、情報学研究者の立場からは、抽象的思考力や論理力の強化を重視すべきであろうと思われる。できるかぎり正確で充実した情報発信に努めつつ、より科学的な論理を構築することは、文字言語の利便性向上と同様の積極的効果をわが国にもたらすであろうと考えておきたい。

11. あとがき

マクロ情報学という手法で、古代からの日本語を主たる対象としつつ、新たな日本人論の構築を試みた。伝統的な経済活性化が有効性を失いがちであるため、進化的視点というあえて従来とかなり異なる論理と方法論を用いて、日本社会の再発展の手がかりを探り、それを変化および生のミームとして表現した。対象とする素材を主に日本語に限ったことは少なからぬ欠陥かもしれないが、ボトムアップ的な日本人論の側面をもち、論理の恣意性を極力避け、かつメディア論で顕著な知見が得られたことなどが大きな利点であろう。

本論文の基本手法は、古来の日本語から日本思想を探った国学の流れをくむともいえる。ただ、「もののあわれ」など従来の見解とは異なる知見を提出した。あえて先駆者を探れば、江戸後期の女流思想家である只野真葛^[25]が近いと考えられる。国学系思想家であったが、日本人の特質を、人の気が「早くはしりかよう」と指摘した。また、200年近く前でありながら、ダーウィンに先んじて「生物の生存競争」などを論じた。基本思想として、本論文と共通した説を先行している。女性が論理的でないなどという迷信をも捨て去らせる先駆者である。

また、提案した日本人像は、和辻のような風土という事物面に拘束されるものではなく、むしろ精神面という情動的観点を重視した。新たな日本人観になりえたのではないかと考えている。特に「生の文化」という国民性は、現在はその潜在的有効性がまだ未確定であるが、ギリシャ哲学などの伝統にも照らすと、日本人が将来的に成功する方向性であると期待したい。

ただ、自然とともに生きるという文明形態は、物質文明型よりもさらに困難であることも指摘しておかなければならない。天明飢饉は複数の火山噴火による寒冷化で引き起こされたが、6年間にも及んでいる。もし今後このような事態が世界規模で起こったとき、どのような備えを行うべきかなど、人類文明の課題は将来的にも容易でないと考えるべきである。

日本人にはさまざまな優れた特質が備わっていると思われ、欠点とされる部分を補強していけば、今後も日本文明は大きく飛躍できる可能性を有するのではなかろうか。文化論は本来的に不分明な領域であるが、情報文化学やマクロ情報学の有効性を高めるために、論じ残した点について今後の論文等でさらに詳しく検討したい。方言を含む音韻や文法など他研究者の発表

も期待している。なお、情緒面での日本人の特質についても抽出していたが、本論文では省略した。

謝辞 只野真葛の思想との類似性を指摘したのは、著者の1人の息子・稲垣宏行であった。歴史好きの彼に感謝する。

参考文献

- [1] ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳、「菊と刀」、社会思想社、1948年。
- [2] 野村総合研究所編、「NRI レファレンス 2号 日本人論」、野村総合研究所情報開発部、1978年。
- [3] 青木保、「『日本文化論』の変容」、中央公論新社、1990年。
- [4] 李御寧、「『縮み』志向の日本人」、講談社、1982年。
- [5] 稲垣耕作、天野真家、「クラウドコンピューティングのマクロ情報学」、情報文化学会誌、vol. 18, no. 1, pp. 3-10, 2011年。
- [6] リチャード・ドーキンス、日高敏隆他訳、「利己的な遺伝子」、紀伊国屋書店、1991年。
- [7] クロード・レヴィ=ストロース著、大橋保夫訳、「野生の思考」、みすず書房、1976年。
- [8] 梅棹忠夫、「文明の生態史観」、中央公論新社、1967年。
- [9] 中根千枝、「タテ社会の人間関係」、講談社、1967年。
- [10] 杉本良夫、ロス・マオア、「日本人論の方程式」、筑摩書房、1995年。
- [11] Peter N. Dale, 「The Myth of Japanese Uniqueness」, Routledge and Nissan Institute for Japanese Studies, 1986.
- [12] 吉野耕作、「文化ナショナリズムの社会学」、名古屋大学出版会、1997年。
- [13] エズラ・ヴォーゲル著、広中和歌子、木本彰子訳、「ジャパン アズ ナンバーワン」、ティビーエス・ブリタニカ、1979年。
- [14] 稲垣耕作、天野真家、「ユビキタス：メディア化と環境化」、情報文化学会誌、vol. 13, no. 1, pp. 3-10, 2006年。
- [15] 大野晋他編、「岩波講座 日本語（全12巻）」、岩波書店、1976-1978年。
- [16] 文部省、「尋常小學國語讀本 卷十二」、大阪書籍、1937年。
- [17] <http://ja.wikipedia.org/wiki/日本語>
- [18] 寺澤盾、「英語の歴史」、中央公論新社、2008年。
- [19] M・マクルーハン著、森常治訳、「グーテンベルクの銀河系」、みすず書房、1986年。
- [20] 柳田国男、「柳田國男全集 8」、筑摩書房、1998年。
- [21] 柴野耕司編著、「増補改訂 JIS 漢字字典」、日本規格協会、2002年。
- [22] George K. Zipf, 「Human Behavior and the Principle of Least Effort」, Addison-Wesley, 1949.
- [23] 藤沢令夫、「ギリシア哲学と現代」、岩波書店、1980年。
- [24] 石川英輔、「大江戸リサイクル事情」、講談社、1994年。
- [25] 鈴木よね子校訂、「只野真葛集」、国書刊行会、1994年。

稲垣 耕作 (いながき こうさく)

1977年京大・工・博士了。現在京大情報学研究科准教授。専門は知性学、マクロ情報学、情報物理学。本学会理事。

天野 真家 (あまの しんや)

1973年京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学専攻修了。京都大学博士(情報学)。湘南工科大学教授。